
我らのHS部

ピエロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我らのHS部

【Nコード】

N8212Z

【作者名】

ピエロ

【あらすじ】

小学校 中学校 高等学校が一貫した結構大きな学園。そこに存在する妙な部活動『HS部』。

自由気ままな活動しかしていないと思われるそんな妙な部活に、高等部の新入生、伊丹 甲いたみいっはそんな部活ならまつたり出来るだろうと思入部する。

平凡で平和な、まつたりした生活をこよなく愛する甲だが、その部活の本当の活動を知り、その生活は大きく変わってしまう。

魔法使いを名乗る女の子、謎の天才科学者、リアル忍者、異世界か

ら来たというお姫様、複雑怪奇な顧問など……そんな彼らと
共におくるちょっと変わった非日常ライフ。

ぶるるーぐ

春・・・

それは10代の男女なら誰しもが胸に期待を込める出会いと別れの季節。

空を見上げると雲一つない快晴、そんな空と宙に舞う桜の花びらは何とまあ風流なモノだなあと思う。

今日は入学式。

今日で俺も高校生の仲間入りさ。

受験に受かったのは結構有名な学園の『美星学園』という小学校中学校 高等学校が一貫した大きな学園だ。

田舎者の俺から見れば未知の世界だ。

入学式に向かうべく、桜並木の通りをのんびりと歩いていく。

俺と同じ新入生だと思われる人の姿は時間が早いせいかあまり見られない。

俺だつて別にいつも早起きしてるワケじゃないよ？ぶっちゃけて言くと、ガラでもなくウキウキしすぎて早起きしてしまっただけさ。だからまあ俺はこうしてのんびりと歩いているわけよ。

俺も色々と期待を胸に込めているが、一番の願いは平和な学園生活だ。

高校生活も平和でありますように・・・っと、心の中で願い事。

だが俺は思う、願い事なんてそうそう叶うわけないと。

だけど、それでもわずかな可能性に期待を込めて願うのが人間つてもものじゃないだろうか？

ま、どうでもいいか。

歩いていくこと数十分。

目の前には学園と校門と、その傍らの『新入生入学式』と達筆な字で書かれている置物。

ああ、死に物狂いで勉強した記憶が蘇ってくるぜ。

「・・・よし、行くか」

気合十分！俺は少し緊張気味で学園へと脚を踏み入れる。

おお、田舎学校とはどこか空気が違う気がするぜ！

それが最初に思った感想だ。

登場人物紹介

伊丹 甲（いたみこう）

高校一年生の新生で、本編の主人公的な存在。

好きな食べ物はカレー 嫌いな食べ物はアスパラとほうれん草、
容姿は普通よりは上くらいのいたって普通な、大したとりえも見当たらない男子高校生。

団長（だんちょう）

高等部3年生で『HS部』の部長。

本名は岡田 英治（おかだえいじ）という名前だが、名前を言う
と怒られるので皆団長という。

『HS部』最強の男で頼れる先輩。

気前の良さと美形な顔立ちは女性に人気だが本人には自覚がない。

望月 美鈴（もちづきみすず）

甲と同じく高等部の新生。

甲と同じクラスで、美人でスタイルもよく、優しくて料理が得意
というまさに男性人から見れば理想のクラスの人気者の女性。

ジャニステイルク・ハイラルド・ウエルバー

高等部2年生の『HS部』の天才的科学家な男。

成績は全国？1という天才だが性格は面倒くさがりな怠け者。
ジャニステイルク・ハイラルド・ウエルバーというのはただ自分
が名乗っているだけで、本当の名前は刈部 秀介（かるべしゅうす
け）

鳳 美香（おおとりみか）

小学校の頃から学園にいて、内部進学的高等部2年生の女性。
本人曰く『魔法使い』らしい。
静かな感じで、割と大人びた女性。

宗重 半蔵（むねしげはんぞう）

『HS部』の情報収集および情報処理担当の高等部2年生の男。
時には天井から、時には掃除用具入れから、時には窓からと神出
鬼没な隠密行動ならお任せあれなりリアル忍者。
整った顔立ちにかなりの美声、いわゆるイケメンのだがオタク
ということであまりモテない。

ミルフィア・ミルス・ミルティリア

何の理由でか『HS部』に所属する貴族のお嬢様。
本人曰く異世界からきた一国の姫だという、高等部の1年生。
気品のある美しさと優しさが魅力的だと言われている。

ミスター・ジョージ

『HS部』に所属する中学部3年生の男。
まったく当たらない出鱈目な推理を連発する自称名探偵。
にぎやかなのが大好きなノリのいいヤツ。
細い身体に似合わず腕っ節は強い。
とあることが起きると人格の変わる多重人格者。

綾川 瑞希（あやかわみずき）

人見知りでやや引つ込み思案な中学部3年生。
人の心が読めるというとんでも能力を持っているという『HS部』
看板部員。

目元が髪で隠れていて、不思議な感じの女の子。

殿田 達也（とのだたつや）

甲と一緒に田舎から出てきて学園に入学した幼稚園からの付き合いの男。

運動神経はかなりよく、勉強の方も中の上で、いいヤツのだが
女性に目がなく、女性に関する情報収集能力は宗重をも凌駕する。

CR

刈部の作った人工知能のAI。

部室そのものがCRであり、様々な機能を兼ね備えた歌って踊れる人工知能。

第一話 題名？そんなの考えてないよ、題名なんてその場で思いついたものばっ

入学式を終え、俺は教室へと向かう。

俺のクラスは1年G組。クラスは全部で7クラス、A～G組みの7つだ。

ちなみにA～Dクラスはいわゆる特進クラス、バカみたいに頭のいいヤツの集まるクラスだ。

俺のいるクラスも含まれる、E～Gクラスはまあ平凡な、いたって普通のクラス。

普通が1番、そうじゃございませんかねえ？

教室に着くと、皆黙々と指定された席に着く。どうやら出席番号順に座るらしく、俺は同じみの1番右列の1番先頭だ。名前、『い』で始まるから。

まあ・・・慣れてるからいいけどね？それでも1番前の席つてのは俺にとってはあまり気持ちのいいもんじゃない。それが新学期なら尚更ね。

だがせめてもの救いは、救いって言うのか？俺の隣の席に昔からの馴染み、殿田がいることだ。

「なあ殿田」

「ん？どうした？」

隣の席に座り、チラチラと周りに視線をめぐらせている昔馴染み、殿田に声をかける。

新学期とあって今は皆基本無言だ。少なからず同じ中学校だった

のであろう人たちが話しているのが分かるが、その声は決して大きくない。

というか、こんな沈黙の空間で大声で話せるヤツがいたら見てみたいぜ。

ということで、殿田にかけた声も自然と小さくなってしまふ。

「俺さ、こういった沈黙苦手なんだよ……」

「知ってるさ、お前昔からそうだったからなあ」

「だからさ、どうにかしてくれよ」

「無茶言つなよ……さすがの俺でもそれはキツイぜ」

「だよなあ」

そんな取り留めのない話をしていると、ガラツと音を立てて閉まっていた教室の前扉が開く。

そこから20代前半くらいの女性の先生が入ってきた。

しかも結構美人、スタイルも中々……これは当たりか？

「おはよ〜ございま〜す、今日からこのクラスの担任になります泉佐奈子です。1年間よろしくお願いしますね」

カツ、カツ、と小気味のよい音を立ててチョークで黒板に名前を書き、ニッコリ笑って一礼。

泉先生が、いい先生そうだ。

「それじゃあ皆も自己紹介してもらおうかな？」

そう言つて1番右列先頭の男子生徒を見てくる。
すなわち、俺だ。

名字のせいが大抵そうなんだよな、こういう状況の自己紹介ってかなり緊張するのにそれが1番最初だぜ？加えて新学期、失敗することすら許されないとマジで処刑モンだろ！俺が何をしたっていうんだよ・・・っ！

「ええ〜とそれじゃあ伊丹君、お願いできますか？」

「あ、はい」

お願いできますか？っていうけど絶対に断れないよな。

俺は緊張気味な内心が表に出ないようにポーカーフェイスを心がけ、立ち上がる。

ワオ！視線が集まってくるぜ！

チラリと殿田を見るとニヤニヤしている。コイツ、後で殴ってやる。覚悟しとけよ？

「―――中学出身、伊丹 甲です。よろしく願ひします」

どうにか嘸まずに言えたぜ〜。心の中でガッツポーズ。

逸る気持ちを抑え、ゆっくりと腰を下ろす。ここまで来てやっと一安心。正直疲れたぜ・・・

「ありがとうございました〜、じゃあ次・・・」

その後は、殿田が普通の自己紹介をしたことに少し驚いたくらいしかなく、普通に自己紹介は進んでいった。

それから先生から明日の流れを聞き、今日は解散ということにな

った。

まあ新学期の初日なんてこんなモンだよな。

「あ、それから部活動の仮入部と見学はもう始まっていますので、皆さんもぜひ見ていってくださいね」

最後に先生はそう言って教室を出て行く。
ふう〜何かから開放された気分だぜ。

「甲〜、お前どっか部活見に行くか？」

「いや〜、とくにないよ」

「お？マジで？じゃあちよつと付き合えよ」

「いいよ、何？また陸上部？」

「いや陸上はやめとく、もっと別なモンやりたいから」

「そつなのか？勿体ねえなあ〜」

カバンを取り、俺と殿田も教室を出る。

殿田は中学の頃、確か陸上で県大会準優勝したことがあったと思う。それを思うと陸上やんないのは勿体ないと思う。

まあ、本人がいいならいいか。

—————

まず向かったのはサッカー部。
うん、やっぱりサブマ○ンシュートの超人技は無いんだね。ち
よっぴり残念。

「殿田お前サッカーできんのか？」

「まあな、運動系全般はいけるぜ？」

「羨ましい限りで……」

殿田は昔から運動神経がよかった。それに比べて俺は、どちらか
というとダメな方だ。その運動神経分けてくれよ！なんて殿田にむ
かって何度思ったことか……、思い出だけで悲しくなる。

そのくらいダメなのだ。

ああ……自分で言うと余計悲しくなってきた……

「じゃあサッカー部にすんの？」

「いやあ〜どうだろ？他も見に行こうぜ」

「りよ〜かい」

どうやらサッカー部は候補の1つらしい。
いいよな、やりたいスポーツを選べるなんて。俺なんて出来るも
のしか出来ないのによ。

次に向かったのはテニス部。

軟球なんて生易しいもんじゃない、硬球ボールを使った硬式テニスだ。当たると痛いんだっけ？あのボール。

とりあえず試合を見学させてくれるというので、試合を見学する。硬式テニス部は男女比率が3：7の割合で女性が多い。それが目当てで入る男子生徒も少なくないらしい。

もしかしてコイツもそうなのか？

そう思い、殿田を見てみると、やや鼻息を荒くして試合をしている女性の先輩の太ももを凝視している。

おいおいマジかよ、そんな理由で入部とか格好悪すぎね？

「殿田、お前テニス部にすんのか？」

「おう、決めたぜ、俺はこの部活に入る」

「さようございませるか・・・」

まあ入る理由なんて人それぞれだよな。俺がどうこう言うことじゃないか。

というワケで殿田の入部先が決まった。

—————

「甲はどこか見なくていいのか？」

テニス部を見に行くために外に出たので、その足で帰ろうとした俺に殿田は言う。

部活ねえ〜どうしましょうかあ〜

「お前運動苦手だから、やっぱり文化部か？」

「そつだな、多分そつなる」

「見に行かなくていいのか？」

「今日はいいよ、そのうち適当な部活見つけて入るから」

「そつか、じゃ帰るかあ〜」

「おつ」

そう言つて2人で帰り道を歩いていく。桜並木の通りは相変わらずキレイだなあと思つう。

俺の隣にいるのがコイツじゃなくて、かわいい女の子だったらどんなに嬉しいことが。

「お前今『何で隣がコイツなんだよ？』とか思つただろ？」

あつ、バレた。

「それはお前もだろ？」

「へへ、よくお分かりで」

そんな取り留めのない会話をしながら家に帰る。

家は学園から徒歩30分の道のりだ。田舎から無理して来た俺と殿田には、自転車なんて文明の利器など持ってこれるはずもなく、

こっつして歩いている。

これから毎日これか・・・今からヤになっちゃうぜ。

それから歩き続けていくと家に着く。

家といっても家賃の安いボロアパートだ。俺と殿田はここに住んでいる。

俺が203号室 殿田が204号室 つまりお隣さんだ。

「じゃあな甲、夕飯になったら呼んでくれ」

「はいはい、了解しました」

俺と殿田はお隣さんだし、仲もいいから基本一緒に飯を食っている。

食費はお互いで出し、料理は俺が作る。殿田は料理できねえからな、俺が作るハメになっている。

「さて、今日はカレーにすつか」

今日は記念すべき高校生活の初日。俺の好物、カレーを食ったって罰はあたらんだろ。

そう思い、食事の準備をする。

殿田と飯を食い、テレビを見ながら少し話をし、解散した後は風呂に入る。

まあ普通だよな。

それから寝る準備をして布団に潜り込む。

時間は11時。

普通の高校生なら寝るには早い時間だろうが、俺は別にすること

もないので寝る。

今日も1日、中々疲れた1日だったぜ。

第二話 睡眠は大事、でも夜更かしするのが現代っ子

半開きになったカーテンから光りが差し込み、その眩しさで目を覚ます。

時計を見ると午前5時21分。

普段よりも1時間近く早く起きてしまったらしい。

クソっ、何でカーテンちゃんと閉めなかつたんだろ、悔やまれるな。それにこんな早起きした時に限って目覚めがいい、はぁ・・・もう二度寝する気にならないし起きるか。

そう思い布団から這い出て、カーテンを全開に開く。

あぁ〜ちくしょう、太陽が眩しいぜ！

「飯作るか〜」

とにかくすることもないし飯を作る。今日の朝食は目玉焼きにサラダ。

目玉焼きは卵を焼くだけだし、サラダに限っては生野菜を洗うだけの簡単なものだ。

卵を焼き終え、野菜を洗い、ドレッシングを掛ければ朝食の完成。手を合わせていただきます。

自分で言うのもなんだけど、目玉焼きの焼き加減が絶妙でうまかった。

ものの数分で食べ終えた俺は食器を洗い、片付け、登校の準備をする。

家を出るときに時計をチェック。時間は午前6時30分。2日続

けて早めの登校だ。

――――

歩くこと30分。

とくに何も起きずに学校に着いた。まあ何か起きたら困るんだけどね。

時刻は午前7時。ちなみにこの学校の登校時間は8時30分までであり、7時に登校してくる人は中々いない。そんな静かな学校を、俺は歩いていく。

教室に着き、横スライド式のドアを開けて教室に入る。
すると教室には1人の女の子がいた。

やや茶のかかった長い髪、俺よりは小柄だが制服越しからでも分かるスタイルのよい身体。って俺はいつたい何を見ているんだよ。

「えっと、おはようございます?」

何となく挨拶をするが、疑問形になってしまった。

そんな俺の挨拶に、むこうも「おはようございます」と返してくれた。何か女子に挨拶されるとそれだけで嬉しい。

「伊丹君はいつもこのくらい早いのか?」

「え?」

自分の机にカバンを置き、中身を整理しようとしたら声をかけられた。

突然のかけ声に、思わず気の抜けた返事をしてしまう。つうーかこの人、俺の名前知ってんだ。

ごめんなさい、俺君の名前知らないや。

「えっと、まあ偶々だよ偶々」

「そうなんですか？昨日も早く来てませんでした？」

そんなことを思って答えた言葉に、意外な言葉が返ってきた。何でこの人俺が昨日も早く来たこと知ってるんだろ？

「まあ昨日も早く来たけど、どうして？」

「私も早く来たから」

「そっか」

まあそうだよな。むこうも早く来ていたんなら、俺が視界に入ってたって不思議じゃないな。

「伊丹君は私のこと分かる？」

話は終わった。そう思いカバンの整理に戻ろうとした瞬間、声をかけられた。

しかも何の脈絡も無い質問だ。加えてそんな質問は俺には答えられない質問だった。

「ええ」と・・・」

どうする・・・正直に言つか？それとも頑張っと思いつか？誤魔化すか？

いやいやどれも難しいぞ。正直に言つと怒られそうだし、思い出せる気しねえし、見た感じこの人には誤魔化しが効かない気がする。ああ・・・どうしよう・・・

「ごめん、分からない」

正直に言おう。

心にそう決め口を開く。

「そっか、じゃあ改めて、私は望月美鈴。貴方は伊丹甲君だよな？」

正直に言ったものの、彼女は嫌な顔も残念そうな顔もせず、改めて自己紹介をしてくれた。

この人、いい人だな〜と思う。

「うん、俺は伊丹甲。よろしくね」

「こちらこそ、1年間よろしくね」

ニッコリと微笑んで望月さんは言う。
すげー、めっちゃ別嬪さんじゃん。

その後は皆が登校してくるまで少し会話をした。
そこで1つ言おう。望月さんはめっちゃいい人だった。

――

「甲〱お前部活決めたかあ？」

「いや、決めてないよ」

今日はまだ授業はなく、学校についての説明やらのガイダンスを受けて終わり、気がつけば放課後。

放課後と言ってもまだまだ昼だけ。

「それより食堂に飯食いに行かない？」

「おおいいね、さんせ〜い」

俺と殿田の昼食は基本学食だ。理由は簡単、弁当作るの面倒くさいし、作るために早起きするのはどうも気が進まない。

というわけで俺と殿田の昼食は学食なのだ。ハハハ、貧乏なのにね・・・

今日は先輩達も午後の授業が無いらしく、食堂は人でいっぱい、かなりにぎわっていた。

購買機のパンをめぐって騒いでいたり、食堂のおばちゃんに昼食を注文するべく長い列を作っては騒いでいる。

俺と殿田もその列に混じる。

並ぶこと十数分。やっと順番がきた。

「おばちゃん、牛丼頼みます」

「あ、俺はパスタ、ナポリタンで」

「はいよ〜」

それぞれ昼食を注文し、俺は牛丼を受け取ると席を捜すべく見回す。

う〜ん、どこも空いてなさそうだな・・・

そんな時。

「あつ、伊丹君、一緒に食べない？」

声をかけられた。

振り返ると長テーブルの端の方に望月さんがいて、小さく手を振っている。

「いいの？」

「もちろんよ、お隣どうぞ」

望月さんに招かれ、俺は望月さんの隣に、殿田は俺の正面に座る。

「伊丹君は今日は学食なの？」

「まあ、弁当作るの面倒くさいし」

「俺も俺も！弁当作るの面倒くさいから、多分これからずっと学食

だよ！」「

「そうなんですか・・・」

やや興奮気味の殿田に、少々押され気味の望月さん。
というか殿田、それ別に自慢できるモンじゃないぞ？

「殿田、お前は料理すら出来ないだろ？」

「え？あ、まあそうともいうな！」

何故か高テンションでいう殿田。コイツこうなると面倒くさいんだよな。

とりあえずそんな会話をしながら俺は牛丼を食べる。
うん、うまい！おばちゃん、中々いい仕事するね。

「望月さんは部活とか決めたの？」

ナポリタンをすすりながら殿田が唐突に言う。コイツ部活の話好きだよな、まあ自分は運動出来るから自慢とかできちゃうもんな。それに比べて俺は・・・はあ・・・

「部活ですか？一応決めてるけど・・・」

「え？マジで！？何部にすんの！？」

おいおいそんながつくなよ、望月さん困ってるよ？
というか鼻息荒い・・・

「えっとHS部っていう部活なんだけど」

「H S部？」

殿田と声がハモった。あんまり気持ちのいいモンじゃないけど。

「甲、聞いたことあるか？」

「いや、あるわけないだろ」

「だよな〜望月さん、それってどんな部活なの？」

まあ当然の疑問だよな、俺も思ったもん。

「H S部は・・・まあ文化部の1つなんだけどね、ちょっとした娯楽部みたいなのかな？」

微妙にはにかんで望月さんは言う。

それにしてもちよつとした娯楽部か・・・のんびり出来そうだな。

「甲、お前入るのか？」

俺の考えを察したのか、殿田が尋ねてきた。ホントに妙なところで鋭いよな、コイツ。

「まあな、だつてのんびり出来そうじゃん？」

「はは、お前らしいや」

「伊丹君も入るの!？」

「うん、今決めた」

「本当！？じゃあ早速入部届けだしに行こうよ！」

「お、おう？」

答えた途端、俺は望月さんに手を掴まれ、望月さんは走り出した。いきなりのこととて転びそうになったが、何とか体勢を立て直して俺も一緒に走り出す。

それから職員室に向かい、入部届けを2枚もらう。それに希望の部活と自分の名を署名し今度は別の建物に向かう。

向かった先は通称部活棟。文化部や運動部の部室は全てここにあるという大きな建物だ。

俺がいるのはその棟の最上階、目の前には横スライド式のドアと『HS部』と達筆に書かれた看板がある。

その時はまだ知らなかった。

この入部届けのせいで俺の日常が変わっていくことを……

第三話 人は見かけによらない、これは本当だと思う

今俺は部活棟という全ての部活の部室が集まる場所の、最上階にいる。

目の前には『HS部』と達筆な字で書かれた看板があり、『HS部』部室のドアがある。

望月さんはドアを軽くノックする。するとドアがすすつと開かれた。

「おじゃまします」

「お、おじゃまします・・・」

部屋に足を踏み入れると、そこには部室とは思えない光景が広がっていた。

部屋の中はかなり広く、奥には立派な机と立派なイスがあり、その脇に見たこともない印の旗がある。中央にはテーブル、それを挟む長めのソファが2つ。右の壁側には食器棚やティーセット、左には本棚。それから両サイドにドアがあるのを見ると、まだ部屋があるみたいだ。

部室って言うより、家って感じだよな。

部室の中には誰もいなかった。

あれ？じゃあ誰がドアを開けたんだ？

「誰かいないんですか？」

望月さんが、呼びかける。

しかしその声に答えたのは人ではなく機械音だった。

「こんにちは、何か御用ですか？」

どこからともなく聞こえる機会音。

いったいどこにいるんだ！？どこから声が出てるんだ！？

「私たちは入部希望で来たんです」

俺が戸惑ってる中、望月さんが俺みたいに戸惑った様子もなく言う。

望月さんはすごいな、俺には無理だ。

「そうでしたか、ではそのソファーにでも掛けていてください。まだ誰も来ていないので」

「分かりました」

望月さんは言われたとおり、中央にあるソファーに腰を掛ける。

「伊丹君は座らないの？」

「え？あ、座る」

望月さんに言われ、俺もソファーに腰を下ろす。中々ふかふかなソファーだ。

それから数十分ほど待つと部室のドアが開かれた。

「お？客人か？」

「みたいですね」

そういつて2人の人が入ってきた。

1人は女性で身長的には普通くらいの身長で、長い黒い髪がキレイな女性だ。

もう1人は男性。俺よりも身長が高く、かなりのイケメンだった。

「美香副部長、お茶の用意をしてくれたまえ」

「分かりました」

そういつて女性の方は手前のドアから別の部屋に姿を消す。

一方男の方はカバンを適当なところに置き、俺達の向かい側のソファに腰を下ろした。

「我らがHS部にようこそ、今日はどいつた用件かね？」

「私たち、入部希望できました」

男の人の問いに、望月さんは落ち着いた様子で答える。ちなみに俺は緊張して話すことなんて出来ない状態だ。

「おお入部希望者か！それは嬉しい限りだ」

本当に嬉しそうに男の人は言う。

「そついえば紹介がまだだったな、俺はこの部の部長であり団長だ」

「だ、団長ですか？」

「うむ、団長だ」

しばらくの沈黙――

というか、自己紹介で名前を名乗らないで団長と名乗る人間を始めてみたぞ？さすがの望月さんも戸惑っているじゃないか。

「君たちは？」

沈黙を破ったのは団長さんの言葉。

「私は望月美鈴っています」

「お、俺は伊丹甲です」

「望月君に伊丹君か。よし！君たちは入部希望者だったのだな、入部届けは持ってきているか？」

「はい、こちらに」

団長さんの問いに、望月さんは短く答えて俺の入部届けと一緒に団長さんに渡す。

団長さんはそれを受け取ると、奥にある立派な机まで歩いて行って引き出しを開けて何かを取り出す。取り出した何かの蓋をとり、入部届けに押し付けているのを見ると恐らく判子だろう。

「よし！これで君たちもこの部の部員だ。これからよろしくな、望月部員、伊丹部員」

「こちらこそ、よろしく申し上げます！」

「お、お願いします」

と、いうわけで今日という日の午後1時30分頃、俺は妙な部活『HS部』の部員となった。

嬉しいのか、そうでないのか・・・はたまた微妙な気分だ。そんな俺に比べて、望月さんはとても嬉しそうだ。何だろうね、この違いは。

「お茶がはいりましたよ」

そう言って現れたのは先ほど別の部屋に消えた女性だ。

その手に持ったお盆の上には湯飲みが4つあり、それら全てから湯気が立っている。熱そうだ・・・

「すまないな、美香副部长。こちらは今部員になった新入部員、望月部員と伊丹部員だ」

「こんにちは、わたしは鳳美香といいます、よろしくね」

微笑みながらそう言われた俺は、少し胸が高鳴ったのが分かった。ヤバイ、すごい美人だ。

「伊丹甲です、よろしく申し上げます」

「望月美鈴です、お願いします」

挨拶をし、湯飲みを受け取る。湯飲みの中は恐らく緑茶だ。緑茶をすすりながら、他の部員が来るのを待った。

熱・・・っ！

――

「――連絡が入りました」

他の部員が来るのを待つこと数十分。またしても機械音が聞こえた。

「そついえば団長さん、この機械音は何ですか？」

「これか？これは部員の1人が作った人工知能のA I『C R』だ」

「A I？」

「そつだ、自らでモノを考え、学習し成長していくプログラム。それがA Iだ」

「そんなモノを作ったんですか・・・すごいですね」

「団長殿、連絡が入ったといったのが聞こえなかったのですか？」

俺が団長さんと話しているとまたしても機械音が部屋に響いた。団長さんは「すまない」と一言言って、用件を聞く。

「どうやら我が父とジョージさんが今日は来ないみたいですね」

「うむ、了解した」

今の話からすると、どうやら部員の2人が今日は来ないらしい。
少し残念だ。

そんなことを思っているとドアが開いた。

「遅くなったでござる」

「お、遅くなってすいません」

入ってきたのは2人。1人は歴史を感じる口調の男。

もう1人は女性で、小柄で目元が髪で見えないおどおどした感じの女の子だ。

ここまでできた思った。この部活の部員はかなり個性的な人ばかりだ。

この2人はどんな人なんだろうか？

知らないうちに俺はそんな期待をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212z/>

我らのHS部

2011年12月26日23時54分発行